

■今月の特選句

2016年1月

逃げ足の速きや忘年会の下戸

都吐夢

気付いていながら詠まれていない風景を詠む。「聞こえないふり二次会の提案に」「飲み放題のコースに下戸は割りを食ひ」。ムムこれじゃ川柳か。

甲冑を解かず番ふや甲虫

壽命秀次

戦国時代の兵士たちもこんな風景があったかも知れぬ。現代版につくり変えましょうか。「ネクタイと言ふ甲冑を解き春の宵」。

滝涸れて秘所を人目に晒しけり

飯塚ひろし

秘所と言うのはアレですね。涸れ滝を吟行しても秘所は見ないふりをせにゃならん。句にしてはならん。「涸れ滝の隠しどころに目を逸らす」。

懐のさも重さうに懐手

麻生やよひ

「ふところに乳房ある憂さ梅雨ながき(桂信子)」という句がある。やよひさんの懐にあるのは、縞の財布か乳房か。それとも懐の深さなのか。

二股の大根美脚持て余す

井野ひろみ

奥さん安いよ。色白で美脚で奥さんの脚そっくり。おっと、セクハラに抵触しちゃあまズイねえ。これはお買い得。二股でも一本の値段にするよ。

巻末の袋とじ切る文化の日

久我正明

袋とじは、製本の方法で開いても何もない。それが艶っぽい画像を見せる方法となり、今、ネットの袋とじを開くと高額請求される。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

片づけはつまり散らかし師走かな
・・・その結末を知りつつの無駄

梅岡菊子

着膨れて見立ての鈍る占い師
・・・予測通りにとんちんかんで

下嶋四万歩

テロの世に紅白歌合戦予告
・・・平和ぼけしているのが怖い

加藤澄子

狐火や科学で説いて座が白け
・・・対極にある詩心化学

金澤 健

存在を知らしめるべく大噓
・・・噓ひとつに演技賞だね

小川純太

咳一つ句帳取り出す漢かな
・・・も一つ咳をして駄句を出す

工藤泰子

襟巻のきつねをだます厚化粧
・・・敵もさるものタヌキ寝入りに

小林英昭

爛々と春画に魅入る冬日向
・・・妻の声して慌てて閉じる

土屋泰山

だれじゃこれこの唄なんじゃ大晦日
・・・紅白の歌知らぬを威張る

花岡直樹

炬燵出すさっそく女が来て入る
・・・続いて猫や俺は隙間に

松井まさし

杭打ちで悔いなき手筈冬構
・・・違法の杭に鉄鎚食らはせ

藤森荘吉

初詣嘘八百を初期化して
・・・お祓い受ける時も邪念が

柳紅生

筆変えれど上手くは書けぬ年賀状
・・・手書きモードの印刷となる

小泉花子

■今月の滑稽句

	背くこと想定外の七五三 大ぼらをカットして聞くおでん鍋	青木輝子 青木輝子 青木輝子
【佳作】	来年も生きる予定の日記買う	
	娘去り炬燵の住まふ納戸にて 小春日や若き妊婦の遠歩き	青山桂一 青山桂一 青山桂一
【佳作】	日ざし受く大根簾や軒浅し	
	いいちいさんになれさうな冬の虹	赤瀬川至安
【佳作】	寄鍋や反省会といふ二次会 あかさたなはまやらわん文化の日	赤瀬川至安 赤瀬川至安
	冬浪に船を降りたる放浪者 金髪振り乱し巴里の神無月	秋月裕子 秋月裕子 秋月裕子
【佳作】	ほんわかと湯気を食らつて一人鍋	
	裸木となるも威厳は損なはず 鼻の瞬きゆつくり丁寧	麻生やよひ 麻生やよひ
【佳作】	裸木となるも威厳は損なはず 鼻の瞬きゆつくり丁寧	
	獅子舞の一人は酔うてトラになり お目出度い季語も重なり初句会 正座して五分もたないお書初	有富洋二 有富洋二 有富洋二
【佳作】	着膨れて指示の外は何もせず 同じ貌もて幾度の年忘れ	飯塚ひろし 飯塚ひろし
	半熟の十一月を送りけり なんやかやすまさにやならぬ十二月 神の留守阿修羅に恋をしてをりし	井口夏子 井口夏子 井口夏子
【佳作】	半熟の十一月を送りけり なんやかやすまさにやならぬ十二月 神の留守阿修羅に恋をしてをりし	
	エスカレーター高嶺の花は二段上	池田亮二
【佳作】	勤労感謝飛び交う言葉多国籍	池田亮二
	冬至からハロウィンへ行く南瓜かな 非正規の増えて勤労感謝の日 口切や道具茶偽物ばかりなる	伊藤浩睦 伊藤浩睦 伊藤浩睦
【佳作】	冬至からハロウィンへ行く南瓜かな 非正規の増えて勤労感謝の日 口切や道具茶偽物ばかりなる	

	ぼっくりのお地藏様に柿落葉	伊藤洋二
【佳作】	麦の芽に環太平洋の向かひ風 へぼゴルフ百八切れぬ除夜の鐘	伊藤洋二 伊藤洋二
	木の実降る地球最後のその日まで 水切って茄子むらさきとなりにけり	稲沢進一 稲沢進一
【佳作】	自由とは争はぬこと餅を焼く	稲沢進一
【佳作】	何もかも「OB集い」年忘れ クリスマス無関心でもケーキ買ふ	井野ひろみ 井野ひろみ
【佳作】	自転車のずてんと転び街師走 木枯は地球のため息かもしれぬ 鱗雲瓦模様となりにけり	上山美穂 上山美穂 上山美穂
	初夢は枕の中へ貯めておく	氏家頼一
【佳作】	首振って否嫌独楽の止りけり 戦死してをれば今頃仏の座	氏家頼一 氏家頼一
	こんなにも静かひとりきりの聖夜 ケイタイにでない決心冬ごもり	梅岡菊子 梅岡菊子
【佳作】	物忘れ少しすすんで年語る 念仏もモーツァルトも紅葉山 鍵かけて二人通院花八ツ手	越前春生 越前春生 越前春生
	木枯らしや右へ左へ千鳥足	岡野 満
【佳作】	名刹の紅葉苛めるライトかな 恨むより笑って暮らせ木の葉髪	岡野 満 岡野 満
【佳作】	忘れてた人から喪中はがきかな 小春日や笑顔で針を刺す看護師	小川鈍太 小川鈍太
	本八日未明のラジオ「深夜便」 実千両肩身の狭いくじ売場	奥脇弘久 奥脇弘久
【佳作】	葛湯吹く渡る世間も半透明	奥脇弘久

	俎板の鯉にもなれず年の暮 賀状書く死語へ葬るキーボード	加川すすむ 加川すすむ 加川すすむ
【佳作】	少子化のおこぼれで良しサンタ様	
	どん栗の袴のお椀どんぶらこ 風邪気味の鼻に押しこむ内視鏡 鱈酒に酔うて少しく痺れけり	笠 政人 笠 政人 笠 政人
【佳作】	風邪気味の鼻に押しこむ内視鏡 鱈酒に酔うて少しく痺れけり	
	冬虹の脚のあたりの森光る 焼芋一個八百円とは暮の街	加藤澄子 加藤澄子
【佳作】	焼芋一個八百円とは暮の街	
	仏手柑は観音様の手の様な 眠りたや今夜も唸る冬の蚊よ 小春日に国産ジェット初飛行	門屋佐多務 門屋佐多務 門屋佐多務
【佳作】	仏手柑は観音様の手の様な 眠りたや今夜も唸る冬の蚊よ 小春日に国産ジェット初飛行	
	すき焼や子牛売れたる祝ひ膳 紅葉樹聖樹にされる温暖化	金澤 健 金澤 健
【佳作】	すき焼や子牛売れたる祝ひ膳 紅葉樹聖樹にされる温暖化	
	眼前を熟柿落とし驚愕す 散る前に散髪されし大銀杏 暗室に鼻好きの眼医者ゐて	川島智子 川島智子 川島智子
【佳作】	眼前を熟柿落とし驚愕す 散る前に散髪されし大銀杏 暗室に鼻好きの眼医者ゐて	
	山眠る未決の書類積んだまま 吐く息の白き弁明信じたし 鶴首して覗く白鳥飛来の地	菅野あたる 菅野あたる 菅野あたる
【佳作】	山眠る未決の書類積んだまま 吐く息の白き弁明信じたし 鶴首して覗く白鳥飛来の地	
	また師走またまた寿命減りにけり 多発する神々のテロ神無月	久我正明 久我正明
【佳作】	また師走またまた寿命減りにけり 多発する神々のテロ神無月	
	鳥瞰の縄張りをして寒鴉鳴く 退屈な俳句がくすり風邪軽し	工藤泰子 工藤泰子
【佳作】	鳥瞰の縄張りをして寒鴉鳴く 退屈な俳句がくすり風邪軽し	
	ある日突然リバウンドした月が出た ラーメンを待つ間の三分夜は長し	小泉花子 小泉花子
【佳作】	ある日突然リバウンドした月が出た ラーメンを待つ間の三分夜は長し	
	新婚のこたつ三方空いてをり 極寒の犬は散歩をキャンセル	小林英昭 小林英昭
【佳作】	新婚のこたつ三方空いてをり 極寒の犬は散歩をキャンセル	

	いつの日か縁切りたいと念じつつ	佐藤義子
【佳作】	うぐいすが仲間と思う歌手冥利 炬燵買い冬將軍を迎え撃つ	佐藤義子 佐藤義子
	頭巾被(き)る鞍馬天狗は寒がり屋	下嶋四万歩
【佳作】	皴寄るは寄る年波の冬支度	下嶋四万歩
【佳作】	林檎狩り冠を正す如く挽ぐ 月を待つビール水割り次に酒	壽命秀次 壽命秀次
	反論の口を封じて大マスク	白井道義
【佳作】	引き連れし一族郎党鳥渡る 口開けて診察台に日向ぼこ	白井道義 白井道義
【佳作】	恵比寿様帰った後の日向ぼっこ あのあのと後が出てこない皇帝ダリア 神がいる空へ空へ皇帝ダリア	鈴木和枝 鈴木和枝 鈴木和枝
	風邪ごち配るティッシュに目の光る 宴会や馬券換金桜鍋	高田敏男 高田敏男
【佳作】	恩返し忘れて鶴に教えられ	高田敏男
【佳作】	掃除代行依頼するため煤払う 竈炬燵なくて淋しきミケであり 襦袢着てニューファッションかと褒められて	高橋きのこ 高橋きのこ 高橋きのこ
	小春日や高松塚古墳を見ゆ	田中 勇
【佳作】	飛鳥美人と出会ふなる小春かな 小春日の橘寺を寄りにけり	田中 勇 田中 勇
	観果樹と成り果てたりし峡の柿 帰省子の髭は父より上手(うわて)なり	田中早苗 田中早苗
【佳作】	「食べられる？」孫の尋ねる烏瓜	田中早苗
	ずる休み態(わざ)と咳する電話口	田村米生
【佳作】	毛糸編むあらぬ詮索しないでね 寒卵呑まされ尻を叩かれる	田村米生 田村米生
【佳作】	紅葉は燃え上がりや温暖化 今の今幸せかなと日向ぼこ 世の中はさっぱりわからん日向ぼこ	津田このみ 津田このみ 津田このみ

- | | |
|---|-------------------------|
| 富士山や雪をまといてえびす顔
【佳作】 一茶忌や暮れの算段ひいひいひい | 土屋泰山
土屋泰山 |
| 【佳作】 綿入のメタボ亭主の着瘦かな
おでん屋の仁義や酒徒の膝送り | 都吐夢
都吐夢 |
| パスワード思ひ出せずに百八つ
年忘れ弔ひ酒になりにけり
【佳作】 形見てふ一年日記買ひにけり | 飛田正勝
飛田正勝
飛田正勝 |
| 初氷つついてみたらキュンと鳴き
【佳作】 じい様の気合いこめたる独楽まわし
じい様の頭揺れます日向ぼこ | 中井 勇
中井 勇
中井 勇 |
| 【佳作】 南瓜ばかり食べて戦に負けたっけ
黒焦げの餅ひつぱたき御免なさい
墓口の口開くばかり年の暮 | 新島里子
新島里子
新島里子 |
| 貫さし棒の穴より初明り
十二匹の羊が跳ねて年新た
【佳作】 人日の湯浴みに耽る日本猿 | 西をさむ
西をさむ
西をさむ |
| 坊ちゃん湯今なお溢れ漱石忌
【佳作】 暖冬にビールの冴えも衰えず | 花岡直樹
花岡直樹 |
| 日向ぼこしまひわすれたねこの舌
ボロ市や豪華の極みカミホトケ
【佳作】 サンタよりティッシュいただく大通り | 原田 曄
原田 曄
原田 曄 |
| 犬小屋の前平然と猫の恋
真緑の冬の蠶螂眩しいよ
【佳作】 寝姿は棺の中用生身魂 | ひがし愛
ひがし愛
ひがし愛 |
| 【佳作】 図らずも黄泉路からきた年賀状
干大根鎮守の籬借り申す
古民家てふ掘り出し物件に冬眠 | 久松久子
久松久子
久松久子 |
| 【佳作】 冬夕焼消さむと大きく息を吐く
水鳥のつがひスイーツスイーツと
初雪や恥づかしさうに降つてゐる | 日根野聖子
日根野聖子
日根野聖子 |

	日のひかり三猿去年の遺しもの 体温にぶつかり鬨(せめ)ぐ冬の雨	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
【佳作】	隙間風本の字の息活き立ちぬ	
【佳作】	西洋のお化けが失せて冬となる 年の暮ゆとり世代へ戻りたし	藤森荘吉 藤森荘吉
	もみじ散る寢床の苔の絨毯に	藤原セツ子
【佳作】	夜の紅葉見返り阿弥陀微笑ます あの人の声とも聞こえ木枯は	藤原セツ子 藤原セツ子
【佳作】	転ばずにつまづきもせず無事師走 速師走老大国の徒競走 大晦日黄泉の国への日を数え	細川岩男 細川岩男 細川岩男
	噴火岩牛のごとくに座す枯野 濡れ紅葉掃かれてしまひ宿の庭	松井寿子 松井寿子 松井寿子
【佳作】	今日も仕事や勤労感謝の日	
【佳作】	わが詩囊小春に欠伸繰り返し 無骨な手掴めば震え返り花	松井まさし 松井まさし
	葱畑朝礼のごと整列す	三橋百笑
【佳作】	金持ちや千両万両実をつけて 若者よみな顔挙げて秋を見よ	三橋百笑 三橋百笑 三橋百笑
	寛から水ほとばしる今朝の春	宮森 輝
【佳作】	元日や来世の為のもう一献 元日や古き国旗のなびきをり	宮森 輝 宮森 輝 宮森 輝
【佳作】	長々と夫の能書冬至粥 水っ洩心に山河青む日の 除夜の鐘十指に余る親不孝	百千草 百千草 百千草
【佳作】	足の指縮めがんばる寒さかな 落ちてなを柿にならんと種ふくむ 手を止める暇とて無しのお正月	森岡香代子 森岡香代子 森岡香代子
	振り返る我に手を振り枯野の木	八木 健
【佳作】	好色が長生きの術薬喰ひ 住職の宗旨替えして聖菓買ふ	八木 健 八木 健 八木 健

- | | | |
|---------------|--|-------------------------|
| 【佳作】 | ふうふうとふろふきふたついいふうふ
白骨の出で湯の白し雪白し
恐るべし北越雪譜雪庇かな | 八洲忙閑
八洲忙閑
八洲忙閑 |
| 【佳作】 | 這ひ這ひをして手加減の歌留多とり
縦のもの横に連ねて干大根 | 柳 紅生
柳 紅生 |
| 刈草にバツタの行方尋ねけり | 山下正純 | |
| 【佳作】 | コスモスの伸びしろは空無限大
薄紅のコスモス似合ふひとありて | 山下正純
山下正純
山下正純 |
| 【佳作】 | 天然のとら河豚元は養殖の
鶉(ひよどり)に万両の赤狙われる
小中高みかんの大小一貫校 | 山本けい子
山本けい子
山本けい子 |
| 【佳作】 | 新蕎麦と覚えられない名のワイン
晩秋や四時に四つの鐘が鳴る
冬に咲く冬しらずの花かれんじゅら | 山本 賜
山本 賜
山本 賜 |
| 【佳作】 | 焼芋は香(か)おなら臭(しゅう)といふ匂ひ
宰相をリードしきれず道教
木の葉髪情にひかれて吸ひ取られ | 横山喜三郎
横山喜三郎
横山喜三郎 |
| 【佳作】 | 寒に耐えやがて箱入り凍豆腐
去年今年原発建屋のある暮らし
会津路や盛り沢山の雪と情 | 吉原瑞雲
吉原瑞雲
吉原瑞雲 |